さくらまち

193号
2020年6月14日

カトリック小金井教会ニュース

司祭のことば
司祭紹介…油谷師
四旬節から復活節まで
助祭叙階を前にして
「年間」の緑豊かな山麓へ
ミサがない今思うこと
信徒異動
クローズアップニュース

復活の主日（４月12日）の聖体顕示。灰の水曜日の翌日、２月27日（木）以来、新型コロナウイルスのため公開のミサは中止となり、今年の聖なる三日間・復活祭は聖堂でミサがおこなうことができなかった。

これも召命なのか？

加藤豊

ヨハネ会志願者のための典礼、４月 24 日（金）

自分の人生が何なのか解らないが、どのような時代に生まれようとも、その人たちは程度の差こそあれ皆「時代の子」としての生涯を送ります。

戦時中に生まれる人たちに負わされた苦労や、何年かに一度は訪れる自然災害にみまわれた人たちの不幸を思うと、ほんとうに自分は今のままでいいのだろうか、と考えさせられることもあります。

しかし人は生まれたいときに生まれてくるわけではなく、また、死にたいときを選んで死ねるわけでもありません。 生まれてくる時代を選べる人なんていません。

そしてまた時代も、おのれの時代がどんな時代かをおのれで決められるはずもなく、それが過去となったときに初めて古代とか、中世とか、人々が口々によぶようになるのであって、その時の流れのなかを生きる人間は、その時を背負い、その時とともに、人生を生きていきます。

みなが、ただただ、みずからが生きることとなった時代を必死に生きていくだけでなのです。

今わたしたちが遭遇している事態は、おそらく教会の長い歴史においては、500年に一回あるかないか、くらいの未曾有なものです。

人類規模の疫病の蔓延、どのような災害においても、人災の側面と天災の側面との両面があるのかもしれません。

そういった点も実に時代というものが関係し、さながら現代は「IT時代」などとよばれたりします。経済問題も安全保障や社会保障も、今の時代に即した管理体制となっており、不思議なもので、最初の衝撃も今ではあたりまえのように人間の側がそれになじんでいくようになります。

このたびの新型コロナウィルス（武漢肺炎）とよばれるものは、おそらくは自然発生的なものだと信じたいが、初動対応がどうであったかは問われています。

多分に人災に左右される天災が、これからはふえるでしょう。それほどに人間は大自然をある程度意のままにしているために、危機管理の問題は複雑化をますだけです。

すでに多くの人が死にました。影もなくしのびより、命を奪います。やがては出口が見つかるでしょうし、また見つけなければならぬでしょう。

いつもいつもウィルスと人類の戦いにおいて時代の象徴のように新しいワクチンが開発されますが、今回の戦いは世界規模であり、社会現象としては人間対病気という枠組みをはるかに超え出てしまった問題という意味で、一つの時代となってしまっている、といったら大げさでしょうか。

一難去ってまた一難といえそうな状況は時代を問わないが、もうここまでくると過去と未来の狭間という長いスパンにまたがる一難です。

この時代を生き、この時代が今や500年に一度あるかないかくらいの事態に出くわし、そこでは世界のみながみな、共通の関心事としてこれをとらえ、同じ時代を一緒に「時代の子」として日々を過ごしています。

もちろん事態が事態だけに、喜んでこの時代のこの特徴を受け入れている人はいないでしょう。ただし、そこにとどまるわたしたちは「時代の子」としてこの喜ばしくはないが貴重なときを共有し、一人一人が「時代の子」として、その証人として、そして、ひょっとしたら、この時代を生きることそのものを自分の召命であるかのように感じとり、だれもがこれを見とどける使命を、心のかたすみにもちはじめているのではないでしょうか。

（小金井教会主任司祭）

イエスに生かされる

油谷弘幸神父

イエスが生きている、わたしを大切にしようとしている。

それに気がついて、生きていきたい、生きていける、と意欲がわ いて、歩きはじめました。

パンとブドウ酒の形で、現存される方のそばに、いつもいたいと望み、司祭をめざしました。

叙階されました。唖然としました。「司祭としてどう生きればいいのか」まったくわからなかったのです。「司祭になること」だけに一心で、そこが大きく欠落していました。

葛藤と模索の日々でした。周囲にいろいろ迷惑をかけました。

小教区司牧には不適格です。ホームレス支援や傾聴ボランティア、さまざま試みました。自分の無能を思い知らされるだけでした。

油谷師、2 月 26 日（水）

司祭としてミサを中心に秘跡の執行にあたること、ただそれだけが自分に可能なことでした。

大司教さまのご理解と信頼できる友人たちのおかげで、司祭として、この単純な原点を生きるだけの生活を許されております。

小金井教会にも、そんな経緯で加藤神父さまのご厚意により、いろいろお手伝いさせていただいております。感謝いたします。

四旬節から復活節まで

2 月 26 日の灰の水曜日は、四旬節の始まりでしたが、翌 27 日（木）から東京教区では公開でおこなわれるミサは当面のあいだ中止となりました。

新型コロナウイルスは、日本中、とくに東京都ではかなり蔓延する状態となり、菊地大司教のすみやかな判断で決定されました。

これを受けて小金井教会でも、公開のミサは中止

灰の水曜日、2 月 26 日（水）

枝の祝別、4 月 4 日（土）

になりました。

受難（枝）の主日には、ミサ中枝の祝福がありますが、今年は前日の 4 月 4 日（土）に加藤神父さまに祝福していただき、翌日以降おのおの教会にきて持ち帰るということになりました。

4 月 11 日（土）の復活徹夜祭は、ヨハネ館 1 階奥の会議室でミサがとりおこなわれ、水の祝福がおこなわれました。

会議室での復活徹夜祭、４月 11 日（土）

また、今年のご復活のプレゼント、メダイのカードと御絵が祝福され、各家庭に発送されました。

復活祭に洗礼を予定していた、子ども一人をふく６名の方々の洗礼も、後日に延期されることになりました。

４月 25 日（土）には、亡くなられた方の葬儀がおこなわれました

ミサや大人数の葬儀はできないため、お骨を祭壇前に置き、身内の方だけの簡素な葬儀がおこなわれました。

葬儀、４月 25 日（土）

聖書と典礼、説教のプリント、教会玄関、４月 26 日（日）

公開のミサがおこなわれないあいだ、毎週、加藤神父さまをはじめ、竹内師、梅崎師、田村師、油谷師、ルイス師などの神父さま方の説教のプリントが用意されました。

毎週の聖書と典礼とともに、教会玄関に置かれ、ミサのない状態でみなさんの渇をいやす一助になったようです。

また、日曜日などにこられて希望する方々に、加藤神父さまをはじめ聖体奉仕者の協力で聖体が授けられました。

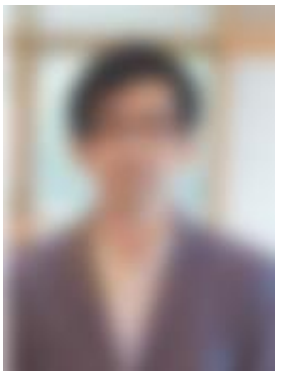
また、青年会のメンバーが協力して、教会学校の子どもたちにご復活のプレゼントを準備して、発送する作業が４月 26 日（日）におこなわれました。

５月 31 日（日）の聖霊降臨の主日に、ご復活に洗礼が予定されていた６名の方々に、加藤神父さまと油谷神父さまから洗礼が授けられました。

青年会の教会学校へのプレゼント発送作業、４月 26 日（日）

洗礼式、聖霊降臨の主日、５月 31 日（日）

助祭叙階を前にして



小田武直（たけなお）

小金井教会のみなさま、ごぶさたしております。神学生の小田です。

このたび、６月６日に助祭叙階の恵みをいただくことになり、あらためてみなさまのこれまでのお祈りに感謝いたしております。

小金井教会から神学院へ送り出していただいた日から、かれこれ６年の月日がたち、わたしも今年で40歳の誕生日を迎えました。あらためて月日の経過を実感させられます。

おかげさまで、神学院の日々は、みずからの弱さゆえのさまざまな危機にみまわれながらも、総じてみると、初めての共同生活、心かよわせあう仲間とのまじわりのなかで、神さまの愛にゆだねる生き方を深めていく日々であったと思います。

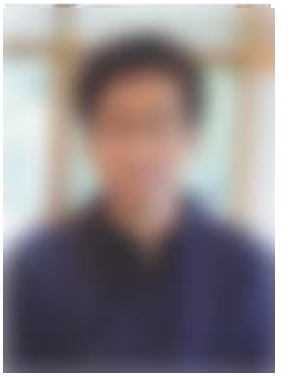
昨年は助祭叙階を前にして、１年の研修となり、みなさまにはご心配をおかけしましたが、この研修期間のなかで、多くの方々のお祈りにより、恵みに導かれてきた日々を思い返し、前に進む勇気をいただきました。これからはよりいっそう、神さまと人々に仕えることに生涯を捧げていきたいと決意を新たにしています。

わたしと信仰との出会いは教会ではなく、アルコール依存症の自助グループ、ＡＡでの出来事でした。22歳の頃、人生の始めを絶望的な状況で迎えたわたしはＡＡを訪ねることになり、そこで弱さやみじめさの極致にあっても、むしろそのことによって無条件に救い上げて下さる神の愛と出会いました。そのことが今のわたしの信仰と召命を動かしている原点にあります。

そして、現代、多くの人々が社会の周辺に追いやられ、居場所をなくしている現状があるなかで、その人たちとともにキリストを中心とした共同体を作っていきたい、ということがわたしの信仰の望みとしてあたえられました。しかし、はたしてそれを、今後の働きのなかでどのように実現できるのかという点で、まだまだ不透明なところがあります。

しかしながら、今の自分には完全にわからなくても、神さまがかならずよきことをおこなってくださること、このことにゆだねていきたいということが現時点でのわたしの心境です。これからも引き続き、お祈りをよろしくお願い申し上げます。

助祭コースにあって



宮﨑翔太郎

みなさまはじめまして。東京教区の助祭コースに所属しております宮﨑翔太郎と申します。いつもわたしたち神学生のために祈り、ささえてくださりありがとうございます。今現在（５月11日）、新型コロナウィルスの影響のため叙階式が延期となっている東京教区と横浜教区の助祭コースの神学生は助祭叙階をひかえている状態です。

あらためまして今までの神学院生活をふりかえってみますと、多くの学びがありました。座学では学問を通して、また共同生活のなかでは仲間に助けられ、奉仕を通して、成長してゆける機会に恵まれました。感謝の思いばかりです。

とくに、わずかながらでもみずからの信仰を客観的に眺め、自己批判精神を身につけられたことは大きな実りであると感じています。しばしば狭い信仰理解のもと、独善におちいり、他者との出会いを見失ってしまうことも多かったこと、しかし時をへるうちに、出会いやさまざまな出来事のなかで、ありのままの現実を受けとめ、見つめていくことの大切さに気づき、そのなかで得られた新しい信仰理解と発見がありました。

これまでの歩みはみずからの独善、甘えに気づくことだけに費やした年月であったといってよく、もし叙階されることになれば、これからが粘りづよく成熟に向けた歩みを始めるときだと感じております。遅々たる歩みですが、どうぞ今後ともお祈りくだれば幸いです。

＊お２人は6月6日（土）カテドラルでの非公開ミサにおいて、助祭叙階を受けられました。

復活節の喜びに満ちた山頂から、「年間」の緑豊かな山麓へ

――典礼暦の「年間」の意義

教会の典礼暦年の「年間」とは、降誕節と四旬節の間（前期）と、復活節と待降節の間（後期）の期間です。先般、聖霊降臨の主日をもって復活節を終えたわたしたちは今、年間（後期）に入っています。

四旬節の40日間の後に復活節の50日間が続き、１年の４分の１は、主イエス・キリストの過越の神秘、すなわちご受難、死とご復活、栄光の昇天および聖霊の降臨に焦点をあてています。

「聖なる過越祭の三日間を出発点として、復活節の新しい時が光源のように典礼暦年全体を照らします」（カトリック教会のカテキズム、1168項）大きな喜びに満ちたお祝いをともなう復活節が、典礼暦年の大いなる山頂であり、そして年間は、その山麓の広大な緑豊かな牧草地です。キリスト者としてのわたしたちは今、その山を下りるように召され、羊飼いの声を聞く羊のように、み言葉とご聖体でわたしたちを養ってくださるキリストとともに歩み、この広大な牧草地で放牧されます。このことから、命と成長の意味合いをもつ緑色の典礼色は非常に適切なものです。

わたしたちは、主イエスが「聖木曜日」にエウカリスチア（ミサ）を制定され、「聖なる過越祭の三日間」にて苦しみ、死に、復活され、「主の昇天」にて御父のもとにもどられ、「聖霊降臨」をとおして教会の使命のためにほとばしる信仰と理解を示されることを、必要としていました。その結果、わたしたちが「聖なる三位一体」の神秘を思いめぐらし、三位一体の営みに入ることができるようになります。

それらの典礼・祭日はすべて、わたしたちが「キリストの聖体」の祭日を迎え、そして年間への移行の準備をするものです。主イエス・キリストの内に生き、キリストの御体と御血がわたしたちを神さまのみ心に従うようにみちびき、わたしたちは年間において成長しつづけ、実を結ぶように召されています。

年間は、教会の大祝日がないことで、わたしたちが救いの神秘によって生きることをじっくりと思いめぐらすことができ、また、主イエス・キリストの３年間にわたる公生活とお教えを導いてくれるときです。

典礼暦の年間は、キリストに対する知識と愛を育むときであり、回心のときであり、キリストの足跡を歩むときであり、キリストの命を生きるときです。教会のいのちのなかで、そして、主イエス・キリストを愛し、従う者の心のなかでの、主のたえまない響きなのです。

残念ながら、昨今のコロナ禍の影響で、わたしたちは当面のあいだ、ミサをはじめ典礼や祝祭日を教会でともに祝うことができなくなっていますが、「主イエス・キリストは、昨日も今日も、また永遠に変わることのない方」（ヘブライ13・8）であり、わたしたちは 主の教会の典礼暦年を生きつづけています。年間は、キリスト者としての実りある生活を送り、他人の生活をも充実にすることができるように、わたしたちにとって重要な事柄を一新し、大切にするための神聖なときとすることができます。（GT）

教会カレンダー

2020.6～11

●年間

*６月*イエスのみ心の月
6月19日（金）イエスのみ心
6月24日（水）洗礼者聖ヨハネの誕生
6月28日（日）聖ペトロ使徒座への献金
6月29日（月）聖ペトロ 聖パウロ
8月6日（木）主の変容
8月15日（日）聖母の被昇天
9月6日（日）被造物を大切にする世界祈願日（献金）
9月13日（日）長寿の集い ミサ後、聖堂（未定）
9月27日（日）世界難民移住移動者の日（献金）
10月18日（日）世界宣教の日（献金）
*11月*死者の月
11月8日（日）10:00 小金井教会共同追悼ミサ（未定）
14:00 教区合同追悼ミサ あきる野教会（未定）
11月15日（日）貧しい人のための世界祈願日
11月15日（日）～22日（日）聖書週間
11月22日（日）王であるキリスト（年間最後の主日）

■ミサがない今思うこと

公開のミサが中止になっている現在、信徒の方々はどのような思いでいらっしゃるか、どのような過ごし方をなさっているか、４月26日（日）教会を訪れた方にお話をうかがいました。

・ミサにあずかれず寂しいので、日曜は教会にお祈りに来ている。ご聖体をいただけた時もありうれしかった。この事態は、神のご計画のひとつではないか。今までの生活がいかに大切であったかよくわかった。

・家では家族でロザリオの祈りをしているが、教会でお祈りできることがどんなにお恵みであったか、あらためて考えさせられている。

・復活祭に洗礼を受ける予定だったので、とても残念で悲しい。でも、「今のこの経験は一生忘れられないものになる」とシスターに励まされ、これも神のご計画のうち、と自分に言い聞かせている。家では、ミサのライブ配信やバチカンニュースを見たりしている。

・日曜は教会へ行くというリズムになっているので、聖堂でお祈りをし、花壇の世話をすることで心が癒されている。独り暮らしなので教会でどなたかと会うだけでうれしい。

・昔「砂漠の隠修士」がいたというが、今わたしたちは「コロナ砂漠」にいると考えている。夫婦ふたりで毎日朝の祈りをして聖書を朗読することが、「砂漠のオアシス」だと思っている。

・ミサにあずかれない今、自分たちの信仰が試されている。あわてず、さわがず、神さまを信頼しておだやかに過ごしている。信仰をもっていてほんとうによかったと思う。

復活節第三主日、４月26日（日）

・今までの自分の信仰生活が、いかに多くの人にささえられていたか、共同体のすばらしさを再確認している。

・週１回教会に来て家族の分も一緒にお祈りをし、「聖書と典礼」を家族にわたしている。

・教会から送っていただくお説教などのプリントはとてもありがたく、くりかえし読んでいる。

・当初はうろたえたが、今は時間がゆっくり流れていてお祈りの時間も長く深くなり、落ち着いて神さまと向きあえる。人間としての原点にもどれという、神さまからあたえられた時間であり、これを自分は全人類の大黙想会と考えている。宗教を越え、世界中の一人一人が気づいていけば、コロナが終息したとき人間は変わっているのではないか。

・教会へ行かない日曜日は、日曜という気がしない。小金井教会のホームページを見るのが楽しみである。

シスターになる道を歩む

プレゼントの祝福

加藤神父さま、シスター、仲間とともに

■ヨハネ会志願者のための典礼

ヨハネ会の志願期に入る式が、４月24日（金）の午後７時から、加藤神父さまの司式により、小金井教会聖堂でおこなわれました。

式の後で、志願者のヌェン・ティ・ハーさんは、「喜びと神に感謝。愛に満たされて。神は、わたしにとって特別な恵みです。神の愛はほかにはないものです」とその喜びを語りました。

菅区長のシスター池田は、「まだ２年目なので、これから長いおつきあいになると思います。わたしたちは、祈りにささえられています」

修練長のシスター中村は、「遠くからきて日本語を学び、日本文化を理解し、日本でシスターになりたいと思っています。最後まで続くようお祈りください。強い召し出しがあると思います」

ベトナムからきて、召命への強い望みをもっているヌェン・ティ・ハーさんのために、わたしたちもともにお祈りしたいと思います。

◆編集後記◆

教会は今、前代未聞の新型コロナウイルス蔓延のため、公開のミサができない状態にあります。それは、灰の水曜日の翌日から、復活節の全期間に及んでいます。

今号は、聖体顕示、復活徹夜祭、志願者や助祭、葬儀、感想、洗礼など、この間の小金井教会の動静を伝えています。教会生活の回復が少しずつ進んでいきますように。(S)

◆ミサの時間◆

＊現在、公開のミサはおこなわれていません。